

要介護高齢者へのアクティビティ・トイを用いた活動支援

杏林大学 保健学部 作業療法学科 斎藤ゼミ

活動経緯

- 施設内の要介護高齢者の1日の生活リズムの中で、積極的に身体活動を増やすような時間が少ない。活動の制約やコミュニケーションの障害が合併すると能動的な活動が制約され、不活動時間が増加する。



言語的・非言語的コミュニケーションを促進するツール「アクティビティ・トイ」の活用

活動目的

- アクティビティトイを用いた活動を通して、要介護高齢者と学生が世代間交流できる機会として活動している。



- 要介護高齢者**
- ①運動機能の向上
 - ②認知・心理機能の賦活
 - ③コミュニケーション能力の賦活
- 学生** 要介護高齢者との理解を深める

活動先

特別養護老人ホーム「愛全園」(昭島市)



開設：昭和39年 (特養東京都第一号)
定員：特養112名 ショートステイ20名

アクティビティ・トイ

- 「アクティビティ・トイ」とは、NPO日本グッドトイ委員会や芸術教育研究所が創った造語 **高齢者の介護予防や心身の活性化につながるおもちゃ**

- 「アクティビティ・トイ」の分類 (松田.2005)

アプローチ分類	アクティビティ・トイ (例)
1 上肢へのアプローチ	輪投げ、KAPLA、wip tip
2 手指へのアプローチ	テロリアンルーレット、てんとうむしジャンケン
3 上肢感覚へのアプローチ	材質マッチング、「コロット」
4 下肢へのアプローチ	魚釣りゲーム
5 座位へのアプローチ	輪投げ、ダーツ、BALANCO
6 認知機能 (記憶・言語) へのアプローチ	KAPLA、パズル、カルタ
7 コミュニケーションへのアプローチ	癒し人形、人生ゲーム、リングウェーブ

- 活動でよく使用する「アクティビティ・トイ」



活動内容

- 活動グループは集団と個別にて実施している。

	集団活動	個別活動
参加者	要介護度3・4	要介護度4・5 初参加者
人数 学生:高齢者	1:3	1:1 (最大6名)
時間	40-60分	10分程度
内容	全員が同じTOYを使って課題	学生と対象者が1:1でTOYを使って課題を達成する

活動中



活動支援を通して

アクティビティトイを用いた活動に対する高齢者の変化

- ・周囲の人との会話量が増加した。
- ・毎回参加している人同士は、なじみの関係ができています。
- ・個別活動から集団活動へ移行した高齢者もいる。
- ・学生との対話を楽しむ。
- ・普段より学生を意識した発言が増加した。
- ・「すっきりした」などの発言があった。
- ・身体機能面では、普段機能訓練しない参加者が立位でKAPLAを懸命に積み→継続して立位時間が向上した。



継続的な活動の関わりに向けて



- アクティビティ・トイを用いた活動は、学生と要介護高齢者間で共通の課題達成に向けて時間を共有でき、世代間交流となった。

- 高齢社会を迎え、マンパワー不足が叫ばれる中、世代間交流を通じた高齢者との関わりは、地域交流の相互理解を深められる。

